



Title	社会復帰へ退院後三年目を迎えて
Author(s)	
Citation	癌と人. 1992, 19, p. 27-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23970
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会復帰へ退院後三年目を迎えて

兵庫県西宮市 T生 (67才)

私は平成元年10月17日「胃癌」で大手術を受けました。その以前8月末に毎年1回自発的に人間ドックに入り無事経過していましたが遂にこの日、レントゲン写真で異常発見、その後、胃カメラや組織検査で最終的に「『胃癌』」ですから今のうちに手術すれば必ず大丈夫です。術後も何でも食べられる様になり仕事も普通にできる様になり、充分、社会復帰できますよ。」と告げられ、丁寧に病変部のカラースライドの拡大写真も見せられました。その時の気持ちは「遂にきたか！」と一瞬どっきりしましたが、担当医の先生の率直な自信のある熱心なお話を100%信じ、人生60有余年一切をお任せして微研病院に入院しました。発癌部位が食道と胃の接点にある為部分切除は不可で全摘となりました。同室の患者さんの話で「この病院にさえ入院できればそれ丈で納得です。」と皆さん、微研病院の診断治療レベルの高さを評していました。その話を聞き、私も人生のすべてを院長先生にお任せしようと肚をきめたのです。しかし家族の心配は大変なものでありましたが私は精神的にビクともしませんでした。チーフドクターのもと、4人編成でその中のお一人が藤田泰彦主治医です。私は軽い心臓障害もある為、手術室に万一の場合の蘇生機器も用意されたと、後でできました。

麻酔開始→意識不明→耳の遠くで誰か大声で「お父さん」と呼ぶのがかすかに聞こえます。私はもうろうとした意識の中で「ああこれは目覚めなければいけないんだな」とさとり必死の力をふり絞って「はい」と答えました。恐ら

く蚊のなく様な声だったでしょう。3回位くり返して完全に目がさめました。痛さも何もありません。私の顔の上に娘の顔が大きくうつりました。又、私の名前を大声で呼んで下さったのは、主治医の先生だったのです。かくて看護婦さんのお世話で病室へ戻り、妻はそれから連夜泊まり込み、その後も自宅より通院看病往復4時間、まさしく妻の戦時状態がはじまりました。

2日目の深夜はげしい幻覚症状におそわれましたが当直医の先生の適切な処置で陽光のさんと照る中で朝寝をたのしんでいました。3日目婦長さんから「静かにベットサイドを横に歩いてみなさい」と云われ驚きましたが、勇を奮って少し歩きました。その時、私の体の各部には6本の治療用のチューブが挿入されていましたが、近代的な治療技術で何の心配も生じませんでした。何よりもまず感謝したいのは主治医の先生のドクターとしての責任感と努力でした。手術日より何度も私の為に泊まり込みをして下さり、早朝深夜の診断、包帯交換など親身の努力をして下さいました。看護婦さんと二人で、私の腹の上で包帯交換に当たられる時など、ドクターの「フウフウ」という息づかいの音まで聞こえます。「外科医の仕事は単に学問技術のみでなく大変な肉体的精神的労働がドクター自身の負担になるんだな」ということをはじめて知りました。更に又、夜勤の看護婦さんの正味の姿を目のあたりに見て全く頭の下がる思いでした。

これだけの大手術のあとなのに10日目にはもう独歩可能となりました。点滴台の車の棒を支

えにして一生懸命歩行練習をしました。その間24時間点滴のみで経口食は一切ありません。それでも、軟便便が出るのです。人間の強靱さに驚くのみです。術後何日目でしたか、便通をたしかめる為、バリウムを飲まされ、きれいに白い便が出たので、ドクターは私以上に「よかった。よかった。」と喜んで下さいました。素人の私には事の重大性がよく理解されていないのです。腸が3ヶ所で切断縫合されていたのです。かくて3分がゆ、5分がゆ、7分がゆと上り、各食を1/2だけ取り、それを更に1/2ずつ、30分以上の間かくをとって食するのです。つまり1日6回の少食です。婦長さんからコンコンと云われたことは、(1)少量ずつ口に入れる。(2)よくかむ。(人の3倍くらい)(3)ゆっくりゆっくりのみこむ。(4)ゲップが必ず出るから一時ストップし、ゲップを吐き出してから次に移る。ということでした。私は今もこれを守っています。ゲップは少量しか出ない時でも同じ効果があってスーッと次のが飲みこめます。

退院後の心得は全く自分の弱い意思との戦いです。大手術でも何と一カ月前後で退院できるのですから医術の進歩には驚きと感謝です。

自宅での食事のコントロールは100%自分の責任です。これをドクターによりかかる事はできません。自分の生への強い強い執着こそ力です。家族全員の協力を得て、(1)やわらかいもの、(2)パサパサしたものは、のどを通らない。(3)こま切れにしてもらう。(4)流動食的にしてもらう。(5)少し塩味にしてもらう。(6)目の前に皿数の多い山盛りの料理を見せない。(7)最後にドクターより妻へのアドバイス『栄養第一とかく考えずに患者の好み第一に考えてあげて下さい。』

お陰様で今では何でも食し量的に他人の80%程度に抑えています。但し、食事の時間は完全に他人の倍程度に合わせゆっくりゆっくりかんでのみこみます。つまり口の中で、自分の「おじや」をどろどろにつくり飲みこみます。又、他人には自分は生来食べるのがおそいのですと

はっきり云っておきます。従って、大人数の宴会や会食はなるべく避けます。つつい無理して他人ペースにまき込まれてしまうからです。食要領さえ守れば手術後の余生は10年、20年大丈夫だと、今では自信を持っています。食事時間中にわざと新聞をよんだり、ベランダに散歩に出たりして気分を変えます。行儀が悪いのではありません。私は通勤1時間の会社へ毎日仕事に出掛けています。決して人生を逃避すまい。対人関係も更に深めようと心に決めています。ストレスを除き、心をきたえることは、リハビリの中心だと信じています。この2年半に辛いこともありました。しかし、リハビリと仕事で生き甲斐をしっかりと見つめることが第一で、時にはそれがぐらつくことがありましたのが本当の姿です。

尚、私個人の注意としては(1)3時間以上の遠方へ旅行に出ない。(2)初風呂(新湯)には入らない。としています。又、若い頃、特に戦前戦中の旧制中学校5年間(その後の大学を含め)の肉体的猛訓練による体力が60才以上の今も基礎体力となって私を支えたことです。このことはドクターもしみじみ「年の割に体力がねれているから手術もやりやすいのです。」と云われました。私は小学校健康優良児。中学校体力検定上級。剣道初段。体操選手。サッカー、バスケット、バレーとすべてに一級選手でした。若い時は、頭脳よりむしろ肉体の鍛練です。私は若い人に告げたい。誰しも成人病にかかる事がある。しかし青年時に鍛練した人は、成人病を克服できるでしょうと。

リハビリの今後の夢は「海外旅行」です。但しグルメは一切なしのつもりです。そして私を終始支えているのは妻の心配りです。これなくしては、闘病は成り立ちません。又、最後に院長先生はじめ微研の医療チームとりわけ主治医の先生の献身的なご努力とご親切に厚く御礼申し上げてつたない体験の一端と致します。

平成4年4月10日